令和５年度第１回京都市図書館協議会摘録

○日　　時：令和５年１１月２０日（月）午前１０時００分～１２時
○場　　所：京都市生涯学習総合センター　３階第４研修室
○出席委員：［９名中７名出席］
　　石田　大輔　委員
　　岩崎　れい　委員
　　梶川　敏夫　委員
　　後藤由美子　委員
　　澤田　瞳子　委員
　　高田　敏司　委員
　　谷口かおり　委員（五十音順）
○欠席委員：２名
○傍 聴 者：１名

１　開会
（１）出席委員紹介
（２）事務局紹介
（３）中央図書館長の挨拶
　現在はモラル・倫理の時代である。モラルの強化をする必要がある。モラルはどのようにして形成されるかと言うと、個人個人の心の訓練が必要である。
　訓練はどこでできるかというと図書館でできる。図書館は時代の基本になるところだと思っており、大変重要なところだと思う。
　図書館については、法律で図書館協議会をおくこととなっている。
　本日は、図書館運営の上での大切な機会であり、いろいろな御意見を賜りたい。
（４）会長及び副会長の選出
　　会長に岩崎委員を選出、副会長に後藤委員を選出

２　報告事項
（１）京都市図書館利用状況等の推移について（平成２５年度～令和４年度）
　事務局から、資料に基づき、「京都市図書館利用状況等の推移」について報告した。

　京都市図書館の利用状況等について、資料１に基づいて、説明する。
　資料１は、ここ１０年の利用状況の推移となっており、上の表は図書館の主な統計数値の表で、下のグラフは各数値の動きを示している。
　折れ線グラフの１番上の緑色のグラフは貸出冊数の推移、上から２番目のオレンジ色のグラフは入館者数の推移だが、両方とも平成２２年度にピークを迎えた後、年によって多少増減はあるものの、やや減少傾向にある。
　参考として全国の貸出冊数の推移も示しているが、全国的にも平成２２年度をピークとして減少傾向にあり、本市と同様の推移であることから、こうした傾向は、スマートフォンの普及などにより、読書に割く時間が減少している等の社会的要因によるものではないかと分析している。

令和２年度、令和３年度はコロナの影響により、臨時休館や、館内の利用を制限し、予約資料の貸出のみにサービスを限定した期間があるなど、夜間の開館時間を短縮したため、貸出冊数、入館者数ともに大きく減少している。

令和３年度の水色のグラフで示している予約冊数や上から３番目の青色のグラフのブックメールによる運搬冊数については、大きく数値が上がり、これまでの最高値となっている。これは利用者の図書館の利用の仕方の変化、読みたい本をインターネット等で予約して、身近な図書館に取り寄せてお借りになるといった利用形態が、定着・広がってきているが、コロナ禍において、この傾向が一層進んだものと考えている。

これは利便性の向上を図ってきた表れでもあるかと思うが、コロナでそうならざるを得なかったという理由だけであれば残念なことであり、図書館でゆっくり時間を過ごし、新しい発見をしていただくなど、興味を広げてもらいたいと思う。

令和４年度は、入館者数・貸出が増えて、予約・運搬が減っているので、そうした利用の形に少し戻ったのではと思う。

なお、本の貸出をするための図書館カードの登録については、後ほどの協議事項としてみていく。

（２）第４次京都市子ども読書活動推進計画の計画期間の延長について

事務局から、資料に基づき、「第４次京都市子ども読書活動推進計画の計画期間の延長」について報告した。

第４次京都市子ども読書計画推進計画の計画期間の延長について、説明する。

京都市では、子どもたちの読書活動を推進するため、平成１６年に京都市子ども読書活動推進計画を策定し、以降５年ごとに計画を策定し、現在の図書館での主な取組は、配布している冊子のとおり、第４次計画に基づいて進めている。

この計画における主な取組については、後ほど担当からご説明させていただくが、第４次京都市子ども読書推進計画は令和元年度から令和５年度までの５年間の計画となっている。

ただし、この計画期間内にコロナ禍があったことも踏まえ、令和３年度から始まった京都市行財政改革計画や現在の京都市基本計画の終期が令和７年度末までであることに合わせ、計画期間を２年間延長し令和７年度末までとすることとなった。

現在、進めている第４次京都市子ども読書推進計画の主な取組内容ついて、説明させていただく。

資料２の子ども読書活動推進計画での主な取組について説明する。

現在は２年間の延長が決まっている第４次計画に基づき、取組を行っているところである。資料には、主にここ 10 年の取組、第 3 次計画以降の取組を記載している。資料の順番が前後するが、時系列に説明する。

平成 26 年（2014 年）からの第 3 次計画では、大きな目標として次の３点に焦点をあてた。

１点目は、乳幼児期から読書習慣を身に付けてもらうための取組、２点目は、学校図書館との連携、３点目は、当時、不読率の高かった中学生への読書啓発を行った。

１点目は、乳幼児期から読書習慣を身につけてもらうために、これまでの幼児対象のお楽しみ会に加え、全館で赤ちゃん対象の行事を実施した。気軽に子どもの読書記録を残せるような「乳幼児の保護者向け読書ノート」を作成し、図書館やブックスタート事業で配布した。ハード面でも、授乳スペースの確保やベビーベッド、トイレのベビーシートの設置を行った。

２点目の学校図書館との連携では、学校では図書室の整備が全校終了し、本や人などのソ

フト面の充実が課題となっていた。図書館では、学校と協力して調べ学習用の推薦図書リストを作成し、増員された学校司書を対象とした研修を実施した。その他参考として、図書館用に改造した出前事業軽ワゴン車「青い鳥号」を配備し、学校からの依頼を受けて授業関連の本を紹介する際、図書館の資料を積んでいくことができるようにしたことも紹介された。

３点目の中学生の不読率の改善を意識した学校図書館との連携として、初年度、中学校と連携するモデル図書館を 4 館指定し、様々な取組を検証し、その結果をもとに、次年度からは全館で中学校との連携をスタートさせた。

つづいて第 4 次計画では、3 次計画をさらに発展させ、特に次の３点に焦点をあてた。

１点目は高校生の読書活動支援、２点目は子どもの読書のリーダーとなる人材の育成（子どもの本コンシェルジュ養成講座）、３点目はブックリスト「本のもり」の普及である。

１点目の高校生の読書活動支援については、第 3 次計画の成果として中学生の不読率は改善したが、第 4 次計画では、高校生の読書離れの課題解決のために、モデル図書館を指定し市立高校との連携に取組んでいる。

担当図書館として下京図書館、東山図書館の 2 館を選び、それぞれ京都市立堀川高校、日吉ヶ丘高校と連携を始めた。コロナ下で中断される時期もあったが、現在も取組を進めているところである。今年度は、北図書館と紫野高校が連携する働きかけを始めているところである。

図書館が行ったアンケート調査で浮き彫りになったのは、高校生には公共図書館の情報が届いていないこと、忙しい彼らには、図書館へわざわざ来ることは億劫であること、教職員も図書館のことを知らないといったことである。

ただし、学校図書館の職員としっかり連携することで、情報は広がりやすく、そこにメリットを感じると来館してくれる高校生もいることや、高校生にとって、居場所として、特に自習室は魅力的な場所であるということが分かった。まず図書館と高校が関係性を築くことが大切と考える。これに基づき現在も取組を進めている。

２点目は、子どもの読書のリーダーとなる人材の育成を目的に、子どもの本コンシェルジュ養成講座を実施した。子どもと本のつなぎ役として欠かせないのが、専門司書の存在であり、これまでも、職員を対象に児童サービスの基本研修は行ってきたが、この講座では、これからの子どもの読書活動の指南役となる人材育成、資質向上を目指した。

令和元年から現在までⅠ期生、Ⅱ期生の合計 37 名が認定され、京都市図書館では総勢 18 名が活動中である。

最後に、ブックリスト「本のもり」の普及だが、平成 14 年に赤ちゃんから中学生を対象に 6 種類のブックリストを作成している。改訂を重ねながら、多くの子どもたちや保護者に手に取ってもらえるよう様々な機会を捉えて周知に努めた。現在では全館での配布に加え、3 歳児や小学 1 年生への全員配布を行っている。

子どもの読書活動推進のための主な取組についての説明は以上となる。

3　報告事項に関する意見

意見　　コロナの影響で第 4 次計画が延長すると聞き、次の計画に向けてどのように進めていくかが大事だと感じた。学校の先生にも聞いたが、最近では、読書感想文ではチャット GPT で書くことも可能であり、少しアレンジしたりしていることもあり、中々見抜くことも困難だとも聞く。インターネットで検索してコピー&ペーストしているとも聞く。文章を作るツールも出てきている。YouTube や tiktok などで 5 分で本を

紹介する動画もある。

そんなこともあり、若者の読書離れは嘘だと言われることもあるが、好みの本も偏っているとも言われている。そのような状況をどのように教養として読書をさせていくのかという大きな課題に代わってきたと思う。

意見　高校生が利用しないのは情報不足だからと言っていたが、大人も同じことが言える。職場でも、携帯で本を予約して近くの図書館に取り寄せることができることを知らない人も多い。京都市図書館のホームページで検索しない人もいるし、する必要がないという人もいる。学生に限らず、大人も情報不足だと思う。

知り合いに高校の図書館司書がいるが、自分が読んだ本の感想を書いて、高校の生徒にも紹介されている。その冊子を毎月発行されている。その冊子を読んで生徒たちも本を読んだりしている。身近な人が本を紹介することは、すごく効果があると思う。

自分の息子が高校生だが、小学校か中学校の時に、友達同士で本を紹介しあう授業を学校でしていた。すごくいい取組だと思った。数多くはなかったので、継続して実施すれば、読書活動が増えると感じた。

意見　第５次子ども読書推進計画の策定をどうするのか、と思っていたが、コロナの影響もあり、この計画を２年間延長すると聞き、了解した。その２年間に第４次計画をしっかりと検証し、第５次計画を見通して策定準備してくことが必要だと思う。

子どもの本コンシェルジュ養成講座について、児童書専門の方がいることは、本当に心強いことだと思う。

京都府立図書館は児童サービスをやめているが、これは京都の子どもたちや子どもの本に関わる人にとって大きな損失だと思う。ぜひ、京都市のコンシェルジュの方が力を発揮して、児童へのサービスや、読書ボランティアの方たちにも研修を開いたりしてほしい。

また、これまでの５か年計画の積み重ねの中で、全小中学校に司書が配置された。府の北部では学校司書がいないところもあり、比して全校司書配置は喜ばしいことだが、週２日の勤務体制ではできることは限られており、まだまだ改善していく点は多い。

先日朝日新聞の記事で、朝８時半から開いている学校図書館で、司書と語り合い本を選ぶ子どもの様子が紹介されていたが、正規・専任でこそできることだ。

意見　私には、小学生と中学生と高校生の３人の子どもがおり、資料で説明もあったとおり平成２２年頃によく図書館を利用していた。その後、小学校や中学校になっていくと図書館から遠ざかることになってきた。子どもたちも図書館に直接足を運ぶ機会は減っている。

小学校では地域のボランティアの方の読み聞かせなどで楽しんでいたし、小学校では読書ノートがあり、読んだ本に対する感想が書けたり、６年間読んだものが積み重なったりして充実していた。また、担任の先生にもよるかも知れないが、クラスに先生のおすすめの本もたくさん置いてあり、子どもたちは手に取ってみて、そこから同じ作者の本を図書室に探しに行ったり、そこから図書館で予約してみようかなといった風に連携もできていると感じており、その取組が中学校や高校にもつながっていけばいいと思った。

中学生の子どもについては、朝読書の時間があり、友達同士でおすすめを紹介しあうなど、図書室の司書の先生が「図書室だより」を発行されていて、おすすめの本と

中学生に読んでほしい本など、たくさん紹介してくれていた。図書離れともいうが今は情報を貯めている時期なのかと思っている。ちょっと落ち着いてくると、きっと手に取る時間が増えてくると感じている。

第４次計画で進めている高校生への支援だが、自分の子どもを見ているとレポートを書くためだけに図書館に行くことはあるが、心の充実のために本を読む時間はなかなか取りづらいというのが実態だと思うので、図書館との連携に大変期待している。

意見　図書館活動の推進をかなり一生懸命されていることがわかる。自分は考古資料館の運営をしていたので、お客様をいかに集めるかということに苦心した。

小学６年生の孫は、学校から帰ってくると宿題をしてから、すぐにタブレットを見ている。タブレットで情報を見ているようだが、図書離れが進行しており、今の時代の流れだと感じる。

特にこの２、３年のコロナ下で IT 化が進んでおり、本をゆっくり見て楽しむということが難しい時代だと思う。皆さんが忙しい時代になったこともあるが、情報過多である。その情報は浅いものが多く、その情報を深く知ることはしにくい時代という感じもする。

大学でレポートを書かせると、ほとんどがネットの情報でレポートを書いている学生がいる。本をゆっくり読んでから、やる時間も今の若者にはないという気もする。

そのような中で、今後、図書館がどういう在り方をしていくのかというのは、ネット社会が発達してくると、今までの考え方とは全く違う世界がやってくると思うので我々は、どういう形で図書館運営を行っていくのか、読書をする場をいかに増やすかといった課題を突き付けられているようにも思う。

お互い知識を出し合って、館長がおっしゃった骨格になるように本を読む、勉強をする必要がある。人生のバリア、心のバリア、体のバリアを作っていくものだと思っている。そういった知識を身につければ生きていく上でもかなり有利になると思うし自分も助けてもらった。

そういったことを子どもたちにわかってもらえたらいいと思うし、社会の中で図書館がどうあるべきかということを考え直す必要があると思った。

意見　利用状況の数値について確認させていただきたい。まず蔵書冊数についてだが、平成２５年度辺りから数字の増減がないが、この辺りの数値は全館でも蔵書冊数の上限ということでいいか？

回答　ここ最近はこの数値で推移している。全体の冊数については、キャパの問題もあり満杯の状態である。

意見　個人登録者数についてだが、例えば３年とか４年とか利用がなければ削除されるということか？

回答　５年間全く利用がない利用者の方については、削除することとなっている。

意見　先日、tiktok や YouTube で本の紹介をしている方が、中学生、高校生向けの本を面白く紹介していて、色々質問を受け付けているが、高校生ぐらいの子が「本はどこで手に入るのですか。」という質問をしていた。今は町の本屋が少なくなり、若い世代が本に触れる機会が少なく、図書館の重要性が増していると感じる。

高校生に対する働きかけをすることは素晴らしいと思っている。高校生は本当に忙しいと思うが、本を読むという経験や、本というものがあるので、私達はそれを読めるということを経験するだけでも大人になったときに生きてくると思う。

また、先日、岩手県の高校の総合文化祭の文芸部門に出席してきたが、盛岡は文芸活動が非常に盛んなエリアで生徒が作成した文芸誌を学内で販売し、売れている。その学校の文芸部に入りたいからその高校に行く生徒もいると聞いた。

文芸誌を読んだが、短歌や俳句の投稿数を見ると、授業でも実施していることもあるが、数百を超える数が高校文化祭に投稿されている。そういった取組を続けることにより、文芸や文学に対する興味というものが変わってくるということを知り刺激を受けた。長い期間の推進計画を進めていくということが大事だと思った。

３　協議事項

協議事項である「読書の魅力とそれを伝える取組」について、事務局から資料に基づき以下の事項を説明した。

京都市図書館の利用については、図書館カードの登録をいただいている方が少しずつ減ってきている傾向にあり、資料３は、その登録者数を年代別に、その年代の人口と比較した登録率の推移を示している。

全体の登録率としては、ここ１０年で約５％下がり、約２５％となっている。

低下率の大きいところで見ると、小学生の年代で約７％～１０％の減、中学生・高校生の年代で約１５％の減、大学生の年代で約２０％の減、２３才～３０才の年代で約１５％となっている。

児童生徒の年代の減少については、この間、学校司書の配置の拡充や資料の充実など学校図書館の充実を図っているので、この層の読書傾向自体がどう変化しているのかは、子ども読書計画の効果検証を行い、確認したいと思っている。

大学生から２０代の層で大幅に減少していることは、先ほど、説明した、スマートフォンの普及などにより、読書に割く時間が減少しているといったことが顕著に表れていると考えている。

３０代以降は、登録率の低下が大きく進んでいるものではないが、登録率自体が、年代が上がるにつれて、低くなっていく傾向にある。

こうした状況を踏まえ、図書館としては、あらためて読書の魅力を伝えていくことで、読書の裾野を広げていきたいと考え、今回の協議会では、「読書の魅力とそれを伝える取組について」を協議テーマとさせていただく。

４　協議事項に関する意見

委員が考える読書の魅力について

意見　私は大人になってからの方が、本をよく読むようになった。読めば世界が広がる。読んだ本に関連した本が、また読みたくなるという風に、本が無かったら今の自分はいないと思っている。今私は、京都家庭文庫地域文庫連絡会という団体で活動をしているが、そこでも読書会を実施している。参加者は課題の本を読んできて、お互い感想を述べ合うことで他の人の読みや気付かなかったことに出会え、刺激的だ。

図書館に行けばたくさんの本があり、本に対する入口がたくさんある。どんどん本に対する興味が深まっていくと思っている。

意見　自分が実際に経験できないようなことを、読書を通じて経験、体験することができる

というところが１番読書の魅力だと思う。

本の主人公はどうしてこのような行動をしたのだろうと、登場人物の気持ちを想像しながら読む。現実社会の中で話をしている相手や、直接お話をすることができない方についても、何を考えているのか、自分の思っていることと違うことを考えているかも知れない、といった人の気持ちを想像することができるということが、現実社会でも生きてくることだと思う。

中西館長がお話していた、心の訓練、心を強くする、広くすることにつながると思っている。

意見　本を良く読むようになり世界が広がっていると感じる。本を読む意義はたくさんあると思う。この魅力をどのように伝えるかと思う。

親の立場として、子どもが本を読むと頭が良くなると思って読ませている方が多いと思うが、頭をよくするために読ませようとしないことが大事だと思う。

子どもが好きな物、興味を持ったものを読ませてあげることが大事だと思う。

意見　SNS の時代で情報が偏ってしまい受け身になってしまう。自分の検索履歴が情報として吸い上げられ、おすすめの情報がでてくる。様々な情報があるが特定の情報に包まれてしまう。社会的に孤立してしまうと、自分と同じ意見の人ばかりとつながってしまうことになり、情報が偏ってしまうことが問題だと思う。

図書館や本屋では、新しいアイデアの発見もあるので多様につながっていくことができる場所だと思う。思わずタイトルにひかれて手に取ってみたり、本を開けた部分の言葉から繋がっていくということが本の魅力だと思う。

意見　読書の魅力については、自分を知ること、世界を知ることに尽きると思う。人間は社会の周囲の人たちとだけでは知ることができないこともあり、自分自身に対しても、自分というものが何であるのか、何を考えているのかを言語化、相対化できないと思っている。言葉に触れること、書かれていることに触れることで、自分自身の思いや、社会というものに何があるのかを学んでいく手段であり、本当に読書の魅力は、人間を磨いていくことに尽きると思っている。

意見　私の大学時代の話だが、本を読んで感化され海外に２か月程行った。その行動は小説を読んだことがきっかけで、自分の行動を後押ししてくれた。本を読むことによって自分の経験となったように思う。書いてあることに夢物語もあるが、小説を読むことにより自分が刺激され、それによって人生が変わっていく、あるいは経験していくことが自分自身でも経験し、図書は非常に大事なものだと思う。

意見　この協議会に参加している方は非常に本を大事に思われている。心の訓練にもなり、自分の思っていることを言語化する力にも繋がるということ、社会における多様性というものを身につけるといった経験になるということを発言いただいた。

では、実際に、読書経験のない子どもたちにどうやって読書の価値を伝えていくのか、大学生以上になって読書というものに魅力を感じていない人たちにどのように魅力を感じてもらうのか意見をいただきたい。

私も大学で教えているが、昔に比べて本を読まなくなったと言われているが、本人が読まなくなったのか、社会がそれを求めているのか気になっている。学生も就職活動が早くなった。また、授業では課題を出しており、課題提出するためには本を読む必要もあるが、課題の量が多いので読む時間がなかなか取れない。

また、就職活動をするにあたり、「ガクチカ」（学生時代に力をいれたこと）とが必

要と言われる。本を読むことがガクチカと思われていないので、学生は外に出るように努めている。社会が学生自体に本を読むことを求めていないと感じている。

読書はインプットで、どこか見えないところでアウトプットされているかも知れないが、最近はアウトプットが求められている時代であり、インプットをするために読書をすることに時間をかけるということが難しい時代である。

図書館を使ったことがない。あるいは、読書に全く興味がない人たちにどのように伝えていくのかといった視点でご意見をいただきたい。

意見　データの確認だが、図書館カードの年代別登録について説明いただいたが、高齢者世代の登録率が少ないということだが、高齢者の方によく貸し出しているイメージがあるのだが。

回答　高齢者の方は多数来られているが、特に長くおられる方は貸出というよりも閲覧している方が多い。借りに来られる方は、予約などをして、本を借りてすぐに退館されるので二極化の状況である。

意見　本を取り巻く環境は極端に分かれていると感じる。

「本が面白い」と知らせるための講演会やイベントをしているが、そこに来る方は本が好きな人で、本に関心のない方は来ない。

書店が開催したイベントで、本を買うとブックカバーをもらえるイベントがあったが、ブックカバーに興味を持ってくれれば本に興味を持つかもしれない。他のジャンルと繋げることで興味を引くこともある。

京都に図書館があることを知らない人もいるかもしれない。京都市には図書館があるということをまず知ってもらう取組が必要だと思う。

意見　Tiktok で本の紹介をする人も出てきているが、京都市も２月から電子書籍サービスを開始している。ネットで京都市図書館の蔵書を調べて読めることを知らせるともっと広がると思う。京都市図書館にアクセスさえしてくれたらいいのだが…。

電子書籍も開始して半年たつので、どのような様子かお聞きしたい。

電子書籍では、読み上げ機能などがあり、バリアフリーになっていると聞く。そういったこともっと発信してく必要があると思う。

以前に、中央図書館では、バリアフリーの企画展をされていたが、毎年継続して実施すればよいと思う。

今ブームと言えるほど、大人も絵本の好きな人が増えた。長い本はどうだろう？学校でも保護者の絵本サークルができ、朝読書の時間に読み聞かせに行く活動が定着している。しかし時間が１０分程度と限られているので、季節や年齢に合わせ絵本から選ぶことが多い。絵本から読み物へ、さらに長編へ、という移行が朝の絵本の読み聞かせでは難しいと感じる。

一方、ある学校で、この朝の読書に、先生が毎日長編を続けて読み聞かせているという実践が、子どもを本好きにしているという例を聞いたことがある。みんなで同じ本を共有しながら、長い本を読んでもらって読み切った経験が、自分でも読むきっかけになっているそうだ。

回答　電子書籍サービスについては、導入当初は約３、６００点のコンテンツが現在は約４、０００点のコンテンツまで増えている。現在は一日平均で１５０件ぐらいのアクセスがある。まだまだコンテンツ数が少なく、全体のコンテンツを見ると児童書の割合が大体５分の１程度しかない状態。電子書籍も借りられる回数が決まっているもの

も多く、上限回数になると借りられなくなるコンテンツがある。

意見　読書バリアフリーについては LL ブックや、本を持つことも難しい人、高齢になられて図書館まで行くことが難しい方に資料が提供できることになることはとても素晴らしいことであり、電子書籍だけではなく、今後はもっと技術が進歩していくとは思うが、誰もが読める環境を整えるということも大事な役割だと思う。

また、絵本から長編物語に移行できるかといったところが問題となっている。子ども自身ではなかなか移行できないので、学校で読み聞かせをしてあげるなど、学校の先生や司書教諭・学校司書がサポートしていくことが必要。家庭での環境も大きく影響していると思う。

意見　大学の学園祭に顔を出した時に、1回生の学生が非常に歴史に詳しかったので何で詳しくなったのか尋ねると、漫画で学んだという回答があった。今の子たちは漫画で知識を得ていることもある。

カルチャー教室の生徒に話を聞くと、図書館に行って調べものをされる方と全く図書館に行かない方もいる。全く行かない方にどのように情報発信するかが問題である。

先日、市立芸大の図書館に行ってきた。京都駅から非常に近く素晴らしい立地だと感じた。学生だけではなく市民も活用でき、アクセスもいい図書館でとてもありがたい。

意見　場所の利便性は大事なことだと感じる。図書館を使用しない人の理由に、「近くにない」という意見もある。特に小学生や高齢者は遠くまで行けないこともある。漫画について、図書館として収集対象とするかどうかは時代によって変わってきたのか。

回答　現在の漫画は、深く掘り下げた内容で、大人が読んでも引き込まれるような作品も多くある。右京中央図書館で様々な取組をしている。

回答　右京中央図書館では、京都の漫画や小説に注目したコーナーを開設するような取組をしている。昔のように漫画を全く受け入れないとうことはない。

意見　時代に合わせて図書館も変わってきていると感じる。

意見　本は文字による「言葉」だけなので、物語を思い描く想像力が必要とされる。漫画にもたくさん良いものがあるが、絵という助けがある分、文字だけの本とは違うメディアなのだと思う。アニメとなると、さらに「音」という助けまであって、ラクで受け身のメディアなのではないだろうか。想像力を使う「本」こそ、成長期の子どもに出会ってほしい。

意見　私は看護師なので医療系の本を借りることが多いが、専門的なことについては本を購入するが、高血圧を治す食べ物や血流改善ストレッチなどの本を借りようとすると予約も多く待ち時間が長い。医療系の本については、借りたい時に借りれるようになればもっと貢献できると思う。

意見　自治体によっては健康支援サービスをしているところもあるが京都市はいかがか。

回答　岩倉図書館では認知症に関するコーナーを充実させている。高血圧やダイエットの本は人気があり予約も入っている状況である。

意見　病院に入院している患者のサービスについて、日本はあまり進んでいないと思う。大学と連携して病院に読み聞かせをするために学生が病院に行くこともあるが、病院には図書館のないところも多く、本を置いてあるコーナーもあるが、環境としては限られていると感じるが、どのような状況か。

意見　勤めている病院では小児科がないため把握できないが、食べ物や日々の生活をわか

りやすく説明するために本を紹介することはある。病院に本があればそのような利用もできるので大学と連携することはとても大事だと感じた。

意見　病院の患者図書室でボランティア活動をしているが、京都の大きな病院で一般のボランティアを受け入れているのは京都大学病院と府立医大の２つである。府立医大では府立大学の図書館と連携しながら選書を進めており、子どもも含め、長期入院の方々には、ご自身の病気について勉強できるような本を府立医大の意見を聞きながら購入している。ボランティアの立場で見ている限り貸出状況が大変活発とは感じない。もっと患者に周知する必要があると感じた。

意見　病院は図書室があるが、子どもはなかなか行けていないと思う。周知方法なのか、部屋を出られない子どもたちにはどうしたらいいのか、様々な課題があると思う。

意見　新聞の業界も同じ悩みを抱えていると思う。新聞の業界では紙であり、紙の新聞はどんどん減少している。ニューヨークタイムズは１０年程前に紙の時代は終わりデジタルにシフトしており、電子版で勝負している。京都新聞でも紙が減る一方、デジタル配信を広げている。

人口減少もあり、図書館の登録者も減少していくということは必然的である。京都市では全国の自治体でも１番人口が減っている都市でり、減少するのは仕方がない。紙に親しんできた読者の人が、紙以外のものを使用する時にはどうしても減少することになる。

政府はマイナンバーカードであらゆる媒体を、あらゆる行政サービスを行えるようにすると言っており、将来的にはマイナンバーカードで図書館を使用できるようになるかも知れない。

大学生の子どもは、調べものをする時に、電子図書館を利用している。電子書籍を借りて旅行に行っており、使いだすと便利だと言っていた。

紙のすばらしさ、思わぬ出会いというものはデジタルの場合では限度があると思うが、紙とデジタルの使い分けを子どもの時に教える時代になってきていると思う。第４次計画はとても良く出来ているが、次回の第５次計画を作成する時にはデジタルの功罪を踏まえた活用法を教えることが必要だと思う。

意見　多くの意見と提案をいただきありがたい。皆さんが読書に対してすごく魅力があると考えるだけでなく、デジタル化が進む時代でも本を読むことを非常に大事と考えておられることがわかった。それと同時に、読書は必要ないと思っている人たちに読書の魅力をどのように伝えられるのかということを考える必要がある。

本日の皆様から意見や提案を今後の図書館運営に反映いただきたい。

回答　本日の協議事項である「読書の魅力とそれを伝える取組」は全てのことだと思う。図書館とは読書の魅力を十分に味わっていただく、書籍を個人のものとはせず、それを他者にどのように伝えるかということに尽きる。

今日の議論については、「読み上手」の方が集まっている会であり、「読み下手」の方がいない。一般的には「読み下手」な方が圧倒的に多いと思う。我々は「読み下手」な方に対して仕事をする必要がある。

読書の魅力とは、「本は面白い」「知識を得るもの」ということから始まるが、本を読んでも「面白くない」「魅力もない」と思っている人にどう魅力を伝えるかが大切。

どういう形で図書館の魅力を表していくのがいいのかということを次回の図書館協議会で議論していただきたい。

5　事務連絡

6　閉会